

幼児保育と幼児教育

倉 橋 惣 三

幼稚園は幼児を保育するところを、幼稚園令にも記してある。その保育といふのは、教育といふのこゝ、さう異り、さう通ずるのか。これは屢々持ち出される問題である。しかもたゞに言葉の使ひ方としてではなく、言葉が事實をきめてゆくところから、實際上、然り、行政的にさへ、いろいろの問題を生ぜしめる。

私の古い記憶は、幼稚園令制定當時に、それを機会として、保育といふ特殊な言葉をやめて、一切、幼児教育、幼稚園教育で統一したいといふ意見が、一部の眞面目な識者によつて論ぜられたことを思ひ起させる。それが正面的に相當深い理論的根據の上に主張せられたものであつたことも想起せられるが、その裏面的理由としては、保育といふ特殊な用語の故に、幼稚園の教育性が、何んさなく軽く、薄く、弱く考へられる傾向のあり勝ちなことを憂ふるところも大になつた。而して、そういう感じは、今日でも、——保育といふことの意義が深くも重くも理解せられ來つた今日に於ても——まだあることであつて、幼児期の教育に熱意をもつ保母諸君なきとして、甚だ物足りないものがあつたりするのである。

いふまでもなく、保育は教育である。未成熟者のゐるところ、教育なきはなく、未發達者に對すること、教育ならざるはあり得ないのである。この意味に於て、幼稚園は、教育精神を以て幼児に接してゐるところである。

たゞしかし、教育は、その意圖に於て同一であつても、對象に應じて、それらの様態を異にし、そこから、教育のそれらの特色を生じ來る。而してその相違は、教育を生活から、その位純化して取り扱ふか、取り扱ひ得るかといふ點にかゝる。

幼児の場合、教育の純化は不可能であり、不自然である。そこには、最もナマな生活に觸れ、また、それを通してのみ

行はれる教育があるだけである。俱に遊ぶことなしに教育は行はれない。身邊の行き届いた保護撫育を與ふることなしに教育は行はれない。少くも、それらの生活接觸を織りませられることなしに、教育を生活からかけ離れさせて行ふことは出來得ない。そこに、年長兒童の教育の場合に異なる様態を免れないのである。免れないことは、生活からかけ離れた様態の方を主にしての見方で、逆にいへば、そこにこそ、そうした教育様態の妙味が存するのである。

さこまでも、この妙味の裡に幼兒を教育してゆくのを、特に名つけて、保育といふのである。たゞ教育といつては、その相違が無視せられる危険があり、その妙味の漂はざることのあるのを惧れるのである。若し夫れ、幼兒教育といふ言葉を以て、直にその特色に徹し、この妙味を感じる程の人々には、幼兒教育といつて、何等差支へないのでもあるが、なかなかそういかない。保育をさこわつて置いてさへ、學校の教室教授と同じやうなことをしたがつたりする人があるのである。

○
しかしまたかういふこともある。保育だから教育ではない。教育的でもなくていふことである。たゞ食物を與へてやればいゝ。たゞ衣服を着せてやればいゝ。たゞ葦寢をさせてやればいゝ。怪俄をさせぬやうに遊ばせて置けばいゝ。遊ばせもしないで、うつちやつて置けばいゝ。さいつた具合で、幼兒を預るだけで任了はれさるのである。

勿論、それだけのこゝでも大切である。缺けたるに補ふところ大である。社會的に意義は廣い。緊急々務たること素よりである。しかし、それだけでいゝものか。少くも、それだけでいゝと思つていゝものか。その上にさいふのでなく、その他にさいふのでなく、それに於てはあるが、その教育的意義が、教育的意圖の形にまで凝集思念せられてなければならぬのである。

一體に、教育といへば精神を、保育といへば身體をさいつた風の考へ方が、さうも取り去られない。教育の對象に身體を置く時、體育といふ立派な教育の一分野になるが、そればかりに止まらず、身體を通して初めて眞に出来る人間の教育があることを忘れてはならない。保育は、身體に關する點が多い。しかもそれは、身體を對象にし、又、身體を通して人間を對象にしてゐる教育、それこそ謂ふところの全人教育なのである。たゞ、そこに教育性の意識がないと、それがつい忘れられたり、落されたりする。

その上に、保育による全人教育をなしつゝある間に、それらゝの教育的の工夫を交へてゐることも亦、保育の教育法を増す所以である。所謂、幼児預り事業の人々には、時々するに、この工夫が餘りにも缺けてゐる。この工夫にばかり凝つて保育を忘れるのが眞の幼児教育たり得ないと同じく、それはまた、眞の保育になり得ない。

そこで、やれ幼稚園式だの、やれ保育所風だのいふ言葉の上の對立が、さも尤もらしい對立としてはやし立てられたりする。さて、それは、實際に何を意味し、何を示すものであらうか。いづれも同じ幼児保育にそんな別のあり得やう筈はないのである。勿論、誤謬の中の優劣を論ずれば、所謂、幼稚園式の方が幼児保育として大きい誤りを冒してゐるかも知れない。それは、教育には必ずしも保育を伴ふことを必然としないからである。それに比して、所謂保育所風の方は、教育的に稀薄であることはあつても、保育には、それが若し、保育として眞に保育なら、教育的のものを伴ふのが當然だからである。

幼稚園は家庭教育を補ふところとされてゐる。何故に、家庭生活を補ふところと言はないか、或方面からは言はれたのである。しかもそれは、家庭生活を補はないのではない。食も補はふ。衣も補ふ。しかし、たゞ、それだけで止まらないのである。それだけなら、何も、そんなに大きな口をきいて、幼児愛護よばはりするが程のことでもない。金をとらないで、物を與へるだけであつたり、親の多忙を手助けするだけであつたりするに過ぎない。即ち昔の所謂慈善事業、今日の社會事業の最低意義に止まる。必要なことはそうぢやないのである。それが家庭生活補助と上べからは見えたとしても、その實は教育的のものでなければならぬのである。そこに、食物配給掛、衣服調達掛とは別の、幼児教育者即ち保姆の存在があるのである。

保姆諸君は、社會事業關係の保姆諸君も、教師でないから教育者でないとは思つてゐない。教師でないところに、保姆としての幼児教育の専門家たり得るのであると確信してゐる。保育を教育から區別して、全く別物であつていゝかのやうに考へてゐたりしてゐるのは、事業を事業としてのみ事に當つてゐる者達の淺薄な考へ方である。